

平成 19 年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会  
現地検討ワーキンググループ現地検討とりまとめ  
議事概要

◆日 時 平成 19 年 7 月 18 日 13 : 00 ~ 15 : 00

◆場 所 大台ヶ原ビジターセンター

◆出席者

<委員> 川瀬 浩 日本野鳥の会奈良支部 副支部長  
高田 研一 高田森林緑地研究所 所長  
高橋 裕史 森林総合研究所関西支所  
高柳 敦 京都大学 講師  
田村 義彦 大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長  
野間 直彦 滋賀県立大学 講師  
日比 伸子 橿原市昆虫館 学芸員 (18日の現地視察のみ参加)  
村上 興正 元京都大学 講師  
横田 岳人 龍谷大学 講師

(以上敬称略)

<事務局>

近畿地方環境事務所	高橋勝志	野生生物課長
	西野雄一	自然保護官
	櫻澤裕樹	自然保護官
(株) 環境総合テクノス	樋口高志	環境共生部リーダー
	保延香代	環境共生部
(財) 自然環境研究センター	永津雅人	第三研究部長
	千葉かおり	第二研究部長代理
	荒木良太	研究員

◆ 議事

- (1) 防鹿柵設置検討箇所について
- (2) シカ捕獲等について
- (3) 実証実験について

## (1) 防鹿柵設置検討箇所について

### ●地点1について

- ・沢筋に張る場合は両生類への配慮が必要。
- ・解説板等を設置して、利用者へのサービスと普及啓発の両面を考慮すべき。
- ・将来的には防鹿柵の中に利用者を案内することについても検討すべき。
- ・溪畔林の植生保全については重要な課題であるので、技術的な設置手法を含めて検討する必要がある。
- ・流水部分については実験的な柵を別途設置することを検討すべき。
- ・防鹿柵の効果を把握のため、防鹿柵で囲わないコントロール地点も検討すべき。

### ●その他の地点について

- ・地点2, 3については本年度中に緊急性は低い。湧水地(地点3より上流部)については植生だけでなく、動物、特に両生類の生息環境として重要な地点であり保全が必要。両生類の専門家へのヒアリング等検討すべき。
- ・西大台については、林冠ギャップに着目して現況の植生等を整理し、防鹿柵設置箇所の5ヶ年計画の検討に活かすべき。
- ・地形的に、ヤマト谷、カツラ谷には適地がまだ存在しそうだが、中ノ谷、ナゴヤ谷は設置に不向きである。

### ●その他防鹿柵について

- ・西大台へ設置については、利用調整地区であることを踏まえ、利用者へ配慮をしてほしい。教育的な面にも配慮をすべきである。
- ・既存の大規模柵については、シカに侵入された場合の保険的な意味合いから、いくつか分割することを検討すべき。
- ・柵内の植生が回復すると侵入される危険性が高くなるので、定期的に侵入確認を実施すべき。

## (2) シカ捕獲等について

- ・植生保全の観点からも、西大台でのシカの胃内容物を把握するべき。
- ・定点、ルートセンサス調査で、東大台では100頭前後、西大台では20頭前後の目撃があった。ドライブウェイ沿いでは夜間20頭から30頭の目撃がある。
- ・西大台では生息密度が低いので、捕獲が技術的に困難なのであれば、当面は生息密度の高い東大台で個体数調整を実施し、目標達成に努め、その間を西大台の捕獲準備期間とするべき。
- ・東で装薬銃を用いた個体数調整を行うと、西へ移動する個体がでるのではないかと？
- ・東と西では移動元の生息地が異なるので、東から西への移動は起こりにくいと考えられ

る。

- ・冬期、個体が低地に移動した後、限られた移動ルート ネットで遮断すれば効果があるのではないか。
- ・以前の調査で得られた GPS の位置情報については、「植生（自然環境保全基礎調査）」、「航空写真」による解析が必要である。
- ・今後は林野庁に対してWGへの参加を呼びかけるべき。
- ・日出が岳～正木峠の西側の森林は急傾斜であり、獣道が出来やすく、2次侵食も起きやすい。

### （3）実証実験等について

- ・柵内ではイチゴ類等いままで生育していなかったものが増え始めている。
- ・数年に一度は柵内すべてのフロラ調査をするべき。推進計画の見直し時には、もう一度調査計画を見直す必要がある。

[文責：近畿地方環境事務所]